

Title	揺籃期の参考掛員として
Author(s)	大澤, 紀子
Citation	静脩 (1999), 臨時増刊号(1999)100周年記念: 14-15
Issue Date	1999-11
URL	http://hdl.handle.net/2433/37845
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

の物流ルートは、各図書館の考え方によるが、滋賀県では、資料提供の本質的機能から、図書館の責任として当然、費用の負担は図書館と考えられていた。柴田氏は、「地域図書館ネットワークに大学図書館が参加することは、大学の「地域開放」を意味し、大学のもっている多くの資源を利用した「地域貢献」と言うことができるであろう。」とまで強調している。私が、3年前に広島、岡山、山口、福岡、大分、熊本について直接にたずねたが進展していなかった。1996年10月に『大学図書館研究』が「第50号記念特集号」を組み、この中の「各論5.利用者サービス」で、吉田憲一氏が大学図書館の公開のこれまでの経緯を述べ、1.公共図書館などとのネットワーク作りへの参加と、2.インターネットを通じた大学図書館のもつ特徴的

な蔵書の公開である、として、基本的に柴田氏と同じ見解を述べている。

大学図書館の地域住民への公開は国公立、私立を含めて拡大していることは事実である。私立大学図書館の公開は早くから行われているが、数年前から登録料(3000円程度)を取って公開する方向があり疑問がないわけではない。私の望みはあくまで現物貸借で、地域住民の利用者本人が大学の窓口まで行かなくとも、公立図書館を通じて手許に届くシステムの確立と、それを公的に認める規定の整備をさらに望みたい。電子図書館だけに目を奪われるのではなく、地味な道であるが地域住民への公開のためにも目をむけて頂きたい。

(たけうち りゅうきょう:元教養部図書館整理掛長
前京都橘女子大学教授)

揺籃期の参考掛員として

大澤 紀子

昭和36年4月、附属図書館は部課制の実施に伴い、従来の運用保管部参考掛が閲覧課参考掛と改められ、本来の参考業務に専念し得る体制が整えられた。掛員2名(尾崎富美枝さんと私)は、従来は外国雑誌の受付、国際交換、文献複写の受付等を主な仕事とする中で、レファレンスワークを行っていたのが実状であった。

まずは参考図書の本棚が急務であった。各目録掛長の援助を得ながら、庫内に眠っていた参考図書類を発掘して開架し、充実に勤めた。昭和42年、参考図書室の拡充に伴い、より組織的に整備することが出来た。

当初の手探り状態のレファレンスサービスからはじまり日常寄せられる質問に真摯に取り組み、何とか利用者の要求を満たしたいと努力する中で、レファレンスサービスに対する認識、資料知識、探す手段も暫時身について行った。長沢雅男著『参考調査資料解説』(昭和42年刊、10-25-サ5)等は有難い指針となった。

当時のレファレンスサービスの主なものは研

究者からで、国内外の文献所在調査とそれの入手、及びその方法であった。しかし、単なる所在調査といっても、当時は全国書誌も不十分で、そう簡単にはすまなかった。ある時、国書総目録に京大蔵と記載され、京大以外にはない唯一の図書、どう探してもみつからずその形跡も見当たらない。何故京大と記載され、何故今は無くなっているのか、それだけでも調べ、回答しようと追求して行くうちにその経過をほぼ辿ることが出来、現在は岡山大学に所蔵することをつき止めた。また、カード目録上は欠本とされている図書を庫内を探索し、要望していた利用者の手元に届けることが出来た。両者ともその喜びは大きく、これが無ければ研究に支障を来すところであったと大変感謝された。同時に我々も大いに報われ、達成感を味わうことが出来たのである。

現在、所蔵調査手段には格段の進歩があり、今述べたようなケースは、手作りのレファレンスサービス時代の事かも知れない。引用文献等

から、嘗ては京大に所蔵していたという事実も、今はその痕跡を辿る事は難しくなっているであろう。またその必要はないことも知れない。

学生からの質問は、レファレンスサービス一般に通じるものであったが、その特徴とする所に、時の政治、社会情勢を反映した質問が寄せられるので、我々は手廻しよく、これに対応する速報的資料を用意するように心掛けた。質問の仕方の下手な学生の要求点を適格に捉え、アップ・ツウ・デートに対応するため、参考掛員として、時の情勢に敏感でいなくてはならなかった。なお、日本図書館研究会、大学図書館研究会をはじめ、様々の研究会への参加、特に政治、社会の現状の要点を把握するに際して、労働組合に参加する図書館員であったことも役立った。

参考掛としてはもう一つ大きい仕事を抱えていた。春秋に附属図書館として催す展覧会の準備であった。企画、資料の選択、解説、ディスプレイ等々。企画については、参考掛だけでなく、課長、和・洋の目録掛長、中でも庫内の図書に精通しておられた鈴鹿蔵書庫掛長は無くてはならない存在であった。当時の有本課長は国立博物館に在職しておられた方なので、資料に対する知識だけでなく、書籍・巻物・軸物・刀剣などの取り扱いを紐の結び方にいたるまで具体的に御教示頂けた事は、殊の外有難かった。当時は書誌、蔵書に詳しい館員の方がおられたので、大半の展覧会は図書館員自身で企画、開催することが出来た。勿論、企画内容により、

専門の教官方の御指導を仰いだり、部局図書室にも御協力を御願いすることも多かった。

参考掛に直接かかわることではないが、利用者である教官の方々との交流から、館員側からお願いしたり、時には教官から、館員の資質向上のためにと講師のお申出をいただき勉学する機会に恵まれた。

野間光辰先生に『たまかつま』他。藤本幸夫先生に『朝鮮語』、笠沙雅章先生に『書林清話』、人文研図書室の鈴木隆一氏に『古文真宝』等講義して頂いた。その他にもロシア語、館員同志の学習（ドイツ語、宮内庁書陵部蔵の源氏物語等）も行っていた。いずれも時間外、有志の集まりではあったが、参考の仕事に大いに役立った。参考掛として、学内外各層の利用者に対応した経験は、後に目録掛に移り、目録を作成する際に、この情報は利用者にとって必要かどうかという観点が働き、目録記述に反映する姿勢が培われた。

長い図書館勤務の中で、特にレファレンスサービスに従事した事により、資料に対する興味を深め、また直接利用者に対応する中で図書館員としての自覚と喜びを飛躍的に高める事が出来たのは有難いことであった。レファレンスワークの仕事は常に図書館員である自分にとって勉強であった。一言付け加えるなら、それは苦痛でなく、推理小説の謎を解く時の喜びに似て楽しくもあった。

(おおさわ のりこ：元教養部図書館参考調査掛長)



昭和35年頃の文献複写室
受付カウンター

オザフィックスという
青写真による複写
(昭和35年頃)

